

九州天皇家論 7章 吉野の宮

九州天皇家の都

出雲・石見國

延喜式・神名帳は古代出雲王朝について多くの史実を秘している。今度は同じ「出雲」の「石見國」の「菟田神社」を訪問してみよう。この神社への訪問によって、今度は「出雲」で「石見國」と呼ばれた國がどこだったのか解明できそうである。もし特定できれば私たちは「石見國」の妻との別離を歌った人麿の絶唱に迫ることができる。

石見國安濃郡 菟田神社

御祭神: 菟田比古神、菟田比咩神、倉稻魂神

合祀: 國常立神

社伝によると、宇多天皇の御代、寛平七年の創祀。菟田首の祖神を祀る神社であり、式内社・菟田神社に比定されている。
(www.genbu.net/engi/index.htm)

「菟田神社」は現在「島根県大田市久手町波根西1942-2」に存在する。社伝によると、「菟田神社」は「菟田首」の祖先を祀る神社である。「菟田首」の祖先とは祭神として祀られている「菟田比古(かんだひこ)」「菟田比咩(かんだひめ)」である。この「菟田」とは島根県大田市ではない。果たして「菟田彦・菟田媛」はどこに居たのか。

「菟田」とは京都郡・菟田

「菟田首」の祖先・「菟田比古・菟田比咩」はどこに居たのか。北九州に「菟田」という地名が存在する。京都郡・菟田町である。京都郡・菟田町が「菟田比古・菟田比咩」の国であろう。菟田という地名はこの地を支配した王の名前だった。「菟田比古・菟田比咩」の国は島根県大田市に存在したのではなく、元々は京都郡・菟田町に存在したのである。

島根県大田市にある「菟田神社」は「菟田比古・菟田比咩」を祀っている神社である。しかし、大田市が「菟田比古」によって統治されたという事実はない。この神社は、元々は「京都郡・菟田」に存在していた。そして八世紀、近畿天皇家によって新しい「出雲国」が島根県に制定された時、この菟田神社も京都郡菟田町から島根県出雲に移された。しかし、神社の由緒は変更されず、神社が存在した本来の住所もそのまま残された。その住所が「石見國安濃郡」である。「石見國安濃郡」とは元々島根県に存在した地名ではなく、京都郡菟田町に存在した地名である。住所が変わっても本籍は変わらないと同じように、「菟田神社」は島根県に転居したが、その本籍は「石見國安濃郡」のままであった。「石見國安濃郡」とは「九州天皇家」の「出雲」の「石見國安濃郡」である。すでに見てきたが九州天皇家の「出雲・因幡の國」は小倉南区・曾根である。九州天皇家の「出雲・石見の國」とはその隣の「京都郡・菟田町」に存在した。「小倉南区」に九州天皇家の「因幡國」・「石見國」は存在したのである。

伊勢國風土記の安濃

「安濃」という地名は「伊勢國風土記」に見える。

安佐賀社

伊勢の風土記、天照大神、美濃の國より廻りて、安濃(あの)の藤方の片樋の宮に到りましき。時に、安佐賀山に荒ぶる神あり。百の往人をば五十人亡し、四十の往人をば二十人亡しき。これに因りて、倭姫命、度會の郡の宇遲の村の五十鈴の河上の宮に入りまさず、藤方の片樋に宮に齋き奉りき。

「伊勢國風土記」の記録では「天照大神」は「美濃」から「安濃」へと進んでいる。この「安濃」とは荻田神社の本籍、「石見國・安濃郡」と同じ「安濃郡」である。「天照大神」は「美濃國」から「石見國・安濃」へ進み、「伊勢」の「度會の郡の宇遲の村の五十鈴の河上の宮」へ入る予定だったが、荒ぶる神のせいで進めなかったと伝える。「美濃」も「安濃」もよく似た名前の付け方である。「美濃」とは「美野」「三野」、「安濃」は「安野」であろう。「安濃」は「九州天皇家」の「石見國・安濃」である。「美濃」も「九州天皇家」の「石見國・美濃」である。

寛文十年に作られたという「人丸秘密抄」に次の記述がある。

人丸秘密抄

石見国美濃郡戸田郷小野といふ所に語家命(かたらひ)といふ民あり。ある時後園柿樹の下に神童まします。立よりとへば、答へて曰く。われ父もなく母もなし、風月の主として敷島の道をしると。夫妻悦てこれを撫育し、後に人丸となりて出仕し和歌にて才徳をあらはし玉へり。

人丸秘密抄には「石見國美濃郡」と書かれている。九州天皇家の「美濃」・「安濃」は「九州天皇家」の「石見國」に存在した郡である。「天照大神」が「美濃」「安濃」から向かった「伊勢」とは九州天皇家の「伊勢」である。「出雲國」・「石見國」・「伊勢國」、これらの古代国家は隣同士の国であった。



人麿・出雲娘子の歌

萬葉集3-429 溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬る時、柿本朝臣人麿の作る歌二首

山のまゆ 出雲の子らは 霧なれや 吉野の山の 嶺にたなびく
八雲さす 出雲の子らが 黒髪は 吉野の川の 沖になづさふ

この題詞の「出雲」だけでは「因幡」か「石見」かは分からない。吉野川に遊びに来ていたと考えると「因幡の國」の娘だったのであろうか。この吉野川とは九州天皇家の吉野の河、小倉南区の竹馬川である。竹馬川は周防灘の満ち潮を受けて逆巻き流れる。人麿も逆巻き吉野川を眺めに来ていたのであろう。出雲娘子は人麿に縁のある女性で身近な存在だったように思われる。その娘が水難事故で亡くなった。火葬にする時、人麿は歌でこの娘を送った。吉野の山とは足立山である。この山は霧がかかることで有名で、別名、「霧ガ岳」とも呼ばれている。火葬を行ったのは小倉南区・吉田であろう。その火葬の煙が足立山に昇っていく。出雲の娘は霧となったのであろうか。足立山の峰に霧となってたなびいている。出雲の娘は川で溺れ、竹馬川の下流まで流された。竹馬河口は周防灘である。出雲の娘の黒髪は河口で漂っている。この歌の作歌時期はいつか。

火葬が初めて行われたのは、文武天皇4年3月、道昭という人を火葬にしたのが初めてだと続紀にある。
(日本文学大系・萬葉集一・頭注)

この通説に従えば人麿の「出雲娘子」の歌は人麿晩年の歌となる。だが、晩年の人麿はこのような情景を詠むことはできなかった。流刑の身であったからである。歌は、人麿も若かった頃の歌であろう。愛する人を失った悲しみの歌である。

石見の海

柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り来る時の歌 二首

石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 潟はなくとも 鯨魚取り 海辺を指して 柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽振る 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄り 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十隈毎に 萬たび かへり見すれど いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎へて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山

反歌二首

石見のや 高角山の 木の際より 我が振る袖を 妹見つらむか
小竹の葉は み山もさやに 乱るとも 我れは妹思ふ 別れ来ぬれば

人麿が妻と別れて京に上って来た時に詠った「石見の海」の歌である。今、私たちはこの歌を新しい場所に立って読むことができる。

石見の海

「石見の海」とは周防灘である。朝日に輝き、夕日に照る海である。梅原猛氏が「水底の歌」でイメージした「山陰の暗い海」ではない。歌は、明るい周防灘と人麿の暗い悲しみを対比させ、その悲しみを一層浮き立たせている。

角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと 人こそ見らめ

このフレーズは、もうひとつの國、「浦がある國」「潟がある國」を前提にして成り立っている。その國には浦があり、潟もあるのに、「石見の國」の「角」には「浦もない、潟もない」と人は云う。浦があり、また潟がある國とは淡海(小倉南区)である。古代多くの入り江があり、島があった。

昔、伊弉諾尊、此の國を目づけて曰わく、「日本は浦安の國、細戈の千足る國、磯輪上の秀真國」
とのたまひき。

このように称えられた國が「近江(淡海)」の國である。それに引き替え、「石見」には浦も潟もない。岩が剥き出しの海岸の國である。「石見」とは「岩海」の意である。

よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし

それでもいいではないか。これが人麿の主張である。なぜなら、ここには、「か寄りかく寄り 玉藻なす 寄り寝し妹を」がいる。

柔田津

この港はどこか。荻田町で港といえば荻田港となるであろう。

石見のや 高角山の

妻は、「石見」の「高角山」に登って人麿が遠ざかっていくのを見送ったのであろう。少しでも高い所に登れば遠くまで見える。その妻に向かって人麿は、別れを惜しむ。

「高角山」はどの山か。「角」のように海に突き出している山か、または、「角」のような形をした山なのか。荻田町で海に突き出ている山は「松山」である。頂上には「松山城跡」がある。



「松山城跡の山頂から北西方向の眺めです。満潮時の曾根干潟で、右端に間島が見えます。
左側の一番高い山は足立山です」 (homepage2.nifty.com/kitaqare/albu04.htm)

妹が門見む 靡けこの山

人麿は「石見」で石見の妻のもとに通っていた。人麿が結婚生活を送っていた「石見」は「京都郡・荻田」である。「荻田町・小倉南区」は景行天皇によって統治されるようになって以来、九州天皇家の都であった。人麿は「荻田」で生まれ、「荻田」で育ち、妻を娶いました。「荻田」が人麿の故郷であった。人麿の一生は「石見」と深く関わる。人麿が最後を迎えたのも「石見」である。

柿本朝臣人麿、石見國に在りて臨死らむとする時、自ら傷みて作る歌一首(223番歌)

鴨山の 岩根し枕(ま)ける われをかも 知らにと妹が 待ちつつあらむ

謎に満ちた人麿の生誕と終焉の地が明らかになる。「苅田」の近くに「貴船神社」がある。その神社の境内に人麿の歌碑がある。人麿青春の歌と思われる。

万葉 2674番歌

朽網山 夕居る雲の 薄れ行かば 我は恋ひむな 君が目を欲り

朽網山に夕方かかっている雲が薄れて行ったなら、私は恋しく思うであろう。わが君の顔が見たくて
(日本文学大系萬葉集三 頭注)

若き人麿が恋した女性が妻となった万葉集の題詞に書かれた妻、「依羅娘子」だろうか。「苅田」が人麿が青春時代を送った故郷であった。やがて、歴史が激動し、人麿の人生も大きく変わる。

人麿臨終の地・石見國

人麿の最後の消息は「石見國風土記」に残る。

石見國風土記 人丸

石見の國の風土記に曰はく、天武三年八月、人丸、石見の守に任ぜられ、同九月三日、左京大夫正四位上行に任ぜられ、次の年三月九日、正三位兼播磨の守に任ぜられる。云々。爾来、持統・文武・元明・元正・聖武・孝謙の御宇に至り、七代の朝に仕へ奉りし者か。ここに、持統の御宇、四國の地に配流せされ、文武の御宇、東海の畔に左遷せらる。子息の躬都良は隠岐の嶋に流され、謫所に死去にき。云々。

人麿の流刑地・「讃岐の狹岑島」は彦島

この風土記録は、持統の世に「四國」に流されたと伝える。人麿に「四國」の歌がある。

万葉220番歌 讃岐の狹岑島に、石の中に死れる人を観て、柿本朝臣人麿の作る歌一首

玉藻よし 讃岐の國は 國柄か 見れど飽かぬ神柄か こだ貴き 天地 日月とともに満りゆかむ 神の御面と 継ぎて来る 中の水門ゆ 船浮けて わが漕ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに 沖見れば とみ波立ち 邊見れば 白波さわく 鯨魚取り 海を恐み 行く船の 梶引き折りて をちこちの 島は多けど 名くはし 狹岑の島の 荒磯面に いほりて見れば 波の音の 繁き濱を 敷栲の 枕になして 荒床に自伏す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを 玉梓の 道だに知らず おぼぼしく 待ちか恋ふらむ 愛しき妻らは

人麿が詠った「讃岐の國」とはどこか。「九州天皇家の讃岐(彦島)」かそれとも「近畿天皇家の令制國・讃岐(香川県)」か。人麿の歌には「中の水門」が詠われている。この表現がいずれの「讃岐」が明らかにする。人麿歌の「讃岐」とは「九州天皇家の讃岐」である。「九州天皇家・讃岐」とは「下関市彦島」に存在した古代國である。「彦島・瀬戸」には「上の水門」「中の水門」「下の水門」と三つの水門(湊)がある。「彦島・老町」は今は陸続きであるが、古代は、「伊豫二名嶋」と呼ばれた四角形の嶋だった。この嶋にはそれぞれの辺に國があり、その國の名が「伊豫」・「土佐」・「讃岐」・「粟(阿波)」であった。

「石見國風土記」が伝える「讃岐」とは彦島・老町に存在した九州天皇家の古代國「讃岐」である。人麿が流されたのはその九州天皇家の「讃岐の狹岑島」であった。流刑の時期は持統の世と伝わる。「持統の世」ではあるが、正確には「持統の世の末」である。その理由は不明であるが、人麿は持統朝の歌人として、数々の歌を詠み、その持統の代に末に「四國の讃岐」(彦島老町)に流された。

名くはし 狹岑の島の 荒磯面に いほりて見れば

人麿は九州天皇家の「讃岐(彦島)」の「狹岑の島」の海辺に住んでいた。そこに、自分と同じ境遇の罪人が亡くなっているのを見た。その妻や子どもは、もはや死んでいることも知らないで、今日帰ってくるか、明日帰つ

てくるかと帰りを待っているであろう。私はその人の家も知らない。その人の家路も知らない。知っていれば行って教えてあげたい。自分も同じ立場である。我が妻も自分の帰りを待ち焦がれているであろう。

人麿の二度目の流刑地「東海の畔」は周防灘の畔

さらに石見國風土記は文武の世に「東海の畔」に流されたと記録している。この「東海」をいわゆる東海地方（静岡）だと読む訳にはいかない。万葉集に人麿が亡くなる直前に歌った歌がある。

柿本朝臣人麿、石見國に在りて臨死らむとする時、自ら傷みて作る歌一首

223 鴨山の 岩根し枕ける われをかも 知らにと妹が 待ちつつあらむ

人麿が亡くなったのは「石見國」である。人麿の最後の消息を伝えたのは石見國風土記。人麿が死んだのは石見國だと記録したのが万葉集。風土記も万葉集も人麿の臨終の地は石見國と伝え、記録している。

人麿が死んだのは「石見國」である。石見國風土記は人麿の配所は「東海」だと伝えている。この「東海」とは当然、「石見國の東海」である。この「東海」とは静岡地方ではない。「石見國」の風土記の中に「東海」と記録されていれば、その「東海」は当然、「石見國の東海」である。この読みを曲げてはいけない。人麿は九州天皇家の「石見國の東海の畔」で死んだ。この史実のどこを曲げてはいけない。



人麿臨終の地・石見國が島根県だと想定すると「東海」は意味不明となる。島根県の海は北の海である。石見國風土記が「北海の畔」と記録していれば問題はないが、石見國風土記は「東海の畔」と記録している。島根県石見は「東海」ではない。地理が狂う。だからといって、この風土記の記録がおかしいのだと解釈するのは二重の誤りを犯すことになる。

石見國風土記の記録……人麿は「石見國の東海の畔で死んだ」は正しい。「北海の畔」で死んだのではない。もし島根県・益田で死んだということなら、「北海の畔」である。人麿は「東海の畔」で死んだ。東海に面した

石見國とは島根県の石見ではない。九州天皇家の石見國である。それは苅田町である。

人麿は九州天皇家の石見國の「東海の畔」に流された。東海とは周防灘である。人麿は周防灘の荒波が押し寄せる「鴨山」と呼ばれた所で亡くなった。

石見とは「岩の海(いわのうみ・いわみ)」

「石見(いわみ)」とは本来、「淡海(あわのうみ)」の対句で、「岩海(いわのうみ)」が原義であろう。小倉南区・曾根の海が「淡海(あわのうみ)」である。この「淡海」に対して、干潟も浦もない岩の荒々しい海に面した國が九州天皇家の「石見國」である。「岩海(石見)」とは苅田の海・周防灘である。



南方向です。松山の先に三菱マテリアルのセメント工場があり、その先に九州電力苅田発電所が見えます。その一帯が苅田港で、その左に神ノ島があります。右の奥の方に日産自動車の工場が見えます。

<http://homepage2.nifty.com/kitaqare/kinn08.htm>

石見の妻・依羅娘子

「石見國」は人麿の妻・依羅娘子が住んでいた国である。人麿が京に上る時、この妻との別離を 妹が門見む 靡けこの山 と詠った妻である。。京に上るまで、人麿もこの妻も共に「石見國」に住んでいた。依羅娘子は、最初の妻である。第二夫人と云うべきは、京に上って後、通った「輕の路」の妻である。「輕の里」に住んでいた妻は人麿より早く亡くなっている。万葉第二卷挽歌・207番歌が輕の里の妻への挽歌である。

依羅娘子は人麿上京後も「石見國」に住んでいた。当時の九州天皇家での婚姻制度は通い婚であるから、夫が上京しても、妻が「石見國」に残っていたのは当然である。妻の名前は「依羅」と書く。読みは「ヨサミ」である。苅田近くの貴船神社に人麿歌碑がある。

朽網山 夕居る雲の 薄れ行かば 我は恋ひむな 君が目を欲り

「朽網山」とは貫山である。人麿は貫山の夕方の雲が薄れていけば、私はあなたが恋しい。あなたの目を見たいと歌った。人麿は「石見国(苅田町)」に住んでいた。人麿青春の歌である。

小倉南区の貴船神社にこの人麿の歌碑がある。人麿はここに歌碑が作られたことを誰よりも人麿が喜んでい

るであろう。ここが彼の故郷である。ここが人麿が育った「石見國」だった。人麿が青春の歌を歌い、挽歌を詠んだのは全て九州天皇家の国々である。「朽網山」は「クタミ山」と読む。そして「石見」の語源は「岩海」である。これらの地名は、「ヨサミ」「クタミ」「イワミ」と「ミ」を共通する。「ミ」とは海であろう。



人麿の妻も「海」の意味を持つ「ヨサミ」の地の出身だった。彼女は人麿より長く生き、人麿の死後、歌っている。

万葉 224

今日今日と わが待つ君は 石川の 貝に交じりて ありといはずやも

人麿の223番歌と妻依羅娘子の224番歌を取り上げてみれば不思議な歌である。普通に考えれば妻は石見國に居る。人麿も石見國に居る。二人は同じ國に居る。二人の距離はそんなに離れているわけではない。なのに、なぜ、妻はただ待っているのか。妻は人麿が石見國に居ることは分かっているように詠う。では、会いに行けばよいではないか。・・・万葉集の歌の理解だけでは納得がいかない。



だが、ここに石見國風土記の記録を挿入すると新たな世界が現れる。人麿はこの時、石見國に流されて戻っていた。人麿の故郷石見國、妻と青春を過ごした石見國、その石見國の東海の畔に人麿は流された。人麿は妻の元に帰りたくとも帰ることができなかった。妻・依羅娘子は人麿が流罪となって故郷へ戻ってきたことを知っていた。帰ってくることができるにもかかわらず帰ってこない人麿を待ちわびていたのではない。

「わが待つ君は」とはただ帰りを待っているという意ではない。妻は人麿が罪を許されて帰ってくるのを今日か今日かと待っていたのである。妻の願いも空しく人麿は東海の配所・石見國(荻田)で罪人のまま死んでいった。妻はもはや人麿に逢うことはかなわない。

225 直の逢ひは 逢ひかつましじ 石川に 雲立ち渡れ 見つつ偲はむ

直接におあいすることはとうていできないでしょう。石川に雲が立ち登ってほしい。そうしたらその雲を見てあなたを偲びます。

感情を抑えています、なんとも切ない歌である。すぐそこまで帰ってきているのに私の元へは帰ってくること

ができない。絵も写真もなく偲ぶすべもないが、石川に立ち登る雲をあなたと思って偲びましょう。

人麿が配所・石見國の東海の畔で臨終に詠った歌は配所・讃岐(彦島)で死者を詠った歌と瓜二つである。人麿の心を汲んで丹比眞人が妻に答えて歌っている。

226 荒波に 寄りくる玉を 枕に置き われここにありと 誰か告げなむ

周防灘の荒波が押し寄せる「石川」の河口で玉を枕に私は死んでいく。私がここに眠っていることを誰が私の帰りを待っている妻に告げてくれるであろうか。

丹比眞人はまるで人麿の死に立ち会って歌ったかのようにみえる。・・・狹岑の島の死人を見てあなたは「その死を妻に伝える人は誰もいない」と詠ったが、その心配はいらない。あなたと狹岑の島の死人は同じではない。あなたには私がいる。あなたが周防灘の畔、ここ荻田の石川の河口に眠っていることは私があなたの妻に伝えてあげましょう。

石見神楽(折尾神楽)奉納

2008 年 10 月 13 日 PM 8:00 ～ 9:00

人麿の歌碑がある小倉南区の貴船神社に奉納される神楽がある。この神楽の名前は「石見神楽」である。HP「企救の里」で拝見しました。貴船神社が存在する小倉南区は九州天皇家の石見國である。ここが本来の石見(岩の海)の國でした。石見神楽は島根県出雲で作られたものと聞きます。従って石見國である荻田町に伝わってきた神楽ではありません。しかしこの神楽が石見國の貴船神社で奉納されているのは偶然とはいえ、何か深い因縁を感じます。いわば里帰りをしているわけで、きっと古代出雲、石見の國に生きた出雲の神々も喜んでおられることでしょう。



(<http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub252.html>)